



Title	AAASと科学技術コミュニケーションの未来
Citation	科学技術コミュニケーション, 2: 47-47
Issue Date	2007-09
DOI	10.14943/25973
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/28275">http://hdl.handle.net/2115/28275</a>
Type	bulletin (article)
File Information	JJSC_47.pdf



[Instructions for use](#)

## 小特集 AAAS とサイエンス・コミュニケーションの未来

2007年6月24日の午後、「AAASとサイエンス・コミュニケーションの未来」をテーマとする研究会が、NPO法人サイエンス・コミュニケーションの主催、STS Network Japanの後援で、東京で開催された。

研究会の目的は、「科学を振興し、社会に奉仕する」というスローガンを実現するべく、科学政策や科学教育、国際的なプロジェクトなどさまざまな場でイニシアティブを発揮してきた全米科学振興協会（AAAS：American Association for the Advancement of Science）の活動について検討し、AAASのような存在を日本の科学者コミュニティはどのように受けとめるべきか、AAASが展開するようなサイエンス・コミュニケーション活動を、わが国におけるサイエンス・コミュニケーションに今後どのように活かしていくことができるか、などについて議論することであった。

科学技術コミュニケーションに関心を寄せる人々の間で、ここ数年、AAASに対する注目が高まり、AAASの年次大会を実際に視察・体験してくる人々も少なからず現われていた。また、「AAASに学ぼう」という動きも出てきた。実際、2006年11月に初めて開催された「サイエンス・アゴラ」は、AAASの年次大会を一つのモデルにしたものであった。

そこで『科学技術コミュニケーション』誌では、上記の研究会で話題提供された方々に当日の報告について寄稿をお願いした。また、研究会参加者をまじえての総合討論についても、その概要を掲載することにした。

全体をお読みいただければわかるように、注目的になっているAAASの活動が全体としてはどのようなものなのか、あるいは、学ぶべき対象として喧伝されているものが、AAASそれ自体なのか、それともAAASの年次大会なのか、など基本的な点についても、必ずしも共通の理解ができているわけではない。しかし、そうした現状も含めて、現時点での議論をきちんと記録に留めておくことは、わが国における科学技術コミュニケーションを着実に前進させていくために必要な作業であろう。